



霊宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第91号
 平成21年6月10日発行
 和歌山県伊都郡高野町高野山306
 (財)高野山文化財保存会
 高野山霊宝館
 電話0736-56-2029
 URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

- 開館時間
5月1日～10月31日
8時30分～17時30分
年末年始のみ
- 休館日
年末年始のみ
- 拝観料
大人 600円
高・大学生 350円
小・中学生 250円
- 専用駐車場あり

袈裟掛石(町石道)

春期企画展

「ほとけの持物と密教法具」

開催中 7月12日(日)まで

春期企画展

「ほとけの持物と密教法具」

期間 7月12日(日)まで

仏像や仏画で表される仏さまの中には、手に何かを持った姿で表されることがあります。蓮の花をもった菩薩や剣を手にした不動明王のお姿などはよく知られています。

曼荼羅には蓮の花や剣の他にも様々な武器や密教法具などを手にした仏さまが描かれています。密教法具は密教の儀礼や法要の時に僧侶が用いるだけでなく、密教法具それ自体で仏さまを表すこともあります。

この企画展では仏さまの手元に注目して、その持ち物や意味について紹介したいと思います。



重文 厨子入俱利伽羅龍剣 龍光院



重文 紙胎花蝶蒔絵念珠箱 附念珠 金剛峯寺

展示リスト

【工芸】

重文 密教法具八口のうち

金銅独鈷杵

金銅三鈷杵

金銅五鈷杵

金銅五鈷鈴

金銅四天王独鈷鈴

重文 紙胎花蝶蒔絵念珠箱附念珠

重文 金銅三鈷杵(伝覺鑿所持) 以上 金剛峯寺

未指定 金銅五鈷杵

重文 灌頂道具類のうち 以上 宝寿院

銅七鈷鈴

金宝冠

銀宝冠

花鳥漆絵竹編篋筒

重文 厨子入俱利伽羅龍剣

未指定 金銅蓮華唐草透彫華鬘

以上 龍光院

未指定 金銅金剛盤 蓮華定院

【絵画】

未指定 西界曼荼羅図 金剛峯寺

未指定 不動明王二童子像 金剛峯寺

重文 地藏菩薩像(祐円筆) 宝寿院

未指定 西界敷曼荼羅図 宝寿院

未指定 弘法大師像 龍光院

重文 普賢延命像 正智院

未指定 善女龍王像 正智院

※同時開催 平常展

県指定 瓜竹の子図 宝寿院

県指定 山水図(餐水喫霞図)

富岡鐵齋筆 靈宝館

他 展示

収蔵品の紹介 65

重要文化財

密教法具八口のうち

金銅五鈷杵

金剛峯寺 平安時代 (12世紀)

縦長23.5cm



弘法大師像 龍光院
(企画展にて展示)

密教法具でインドの武器を源流とし、煩惱を打ち砕くとされ、またほとけの知恵の堅固なことをあらわす金剛杵のうち、先端が五つに分かれているものを五鈷杵といいます。左の写真のような弘法大師像は真如様大師像と呼ばれる形式のもので、弘法大師の弟子である真如親王が描き、伽藍御影堂に納められている御影像(秘仏)がもとになっています。左手に数珠、右手には五鈷杵が握られています。また五鈷杵を持つほけとして、愛染明王や金剛薩埵などが知られています。密教系絵画では普賢菩薩も五鈷杵を持ちます。



重文 金銅五鈷杵

両端の鈷がそれぞれ金剛界・胎藏界の主要な三十七尊をあらわし、全体

で両部(両界)曼荼羅の世界を集約しているといわれます。そのため金剛杵の中でも特に尊重されています。

本品は弘法大師が唐より請来し、京都の東寺に伝わる五鈷杵(国宝)をもとにして作られたとみられます。特徴としては把(握る部分)の中央が八角十六面の切子形となっていて、各面には丸い鬼目が刻されています。また鉤爪状の脇鈷にはそれぞれ三つずつ、金剛牙と呼ばれる葉っぱのような形の飾りが付いています。大師請来品に比べると脇鈷の張りが緩やかで本来の武器性は影を潜め、当時の日本人の好みに合った、優美な作風となっています。

(F)

次回予告

第三〇回大宝蔵展

「高野山の名宝」

国宝 八大童子立像のうち
六軀(指徳童子・阿耨達童子除く)
展示予定です。

高野山の名鐘

其の13 親王院の鐘

親王院の鐘は、門をくぐって左手の鐘楼堂に懸かっています。大きさは通高四尺五寸四分、口径二尺四寸九分。この梵鐘には長い銘文が刻まれています。(下記枠内参照)

その内容を簡単に紹介いたします。親王院は真如親王の開基で、草創

以来九百年の歳月を経て、その間興廢を繰り返している。享保年間(一七六一〜一七三六)の衰退のち永く廢れていたが、菅原宗辰公の母君が妹の勧めによって、延享五年(一七四八)現在の様子に再建された。



親王院鐘楼堂

黄金のほか仏具類を寄進されたが、今再び宝暦七年(一七五七)の春に、一族・親類の冥福のために、この鐘も寄進された。彼女の祈願成就とその善行を残すためにこの鐘に親王院の弘範師が銘文を記した、というような内容となります。

親王院の開基は周知のとおり真如親王です。真如親王は平城天皇の第三皇子で、後に弘法大師の門にて修学され、弘法大師十大弟子の一人になられました。求法の志高く、六十歳を過ぎてから中国へお渡りになり、インドまでをも目指されました。その途上、現在のマレーシアにてお亡くなりになりました。銘文を記された弘範師は親王院再興の祖であります。宝暦七年から金剛峯寺座主も務められました。

そして、この鐘を寄進された菅原宗辰公の母君(浄珠院徳霖了潤大姉)について紹介いたします。菅原宗辰は、加賀藩前田家(前田利家を初代とする)の七代目藩主です。菅原道真を祖とすることより、菅原を名乗



っています。その宗辰の母が親王院の再興に際して多額の浄財とともにこの鐘を寄進されました。

ここで歴史に目を向けてみます。宗辰は延享二年(一七四五)藩主となるも、翌年には二十二歳の若さで亡くなります。跡を継いだ重熙は宗辰の母が養育係を務めた宗辰の弟です。重熙も八年後の宝暦三年(一七五三)に二十五歳で亡くなります。その間に加賀騒動と呼ばれるお家騒動が起き、その後藩主となった重靖も半年足らずで亡くなり、加賀藩は混乱します。大應院梅開雪峯大居士は宗辰、謙徳院續甫尚故大居士は重熙、梅園院心操紹源大姉は宗辰の妻の戒名です。このような歴史的背景からみると、子どもの冥福を祈るとともに、藩主の妻として、母として加賀藩の安定を切実に祈願しての寄

進であったのではないかと想像できま
す。
この鐘は毎
日夕方、伽藍
の鐘に合わせ
て撞かれてい
るとのこと
です。(K)

梵鐘銘文

親王院者相傳真如親王ノ之遺跡矣草創以來九百餘載其間興廢幾回乎享保中罹平回祿災之後雖佛閣改造而僧舎不復也○有年矣爰有加能越三州刺史松平羽林中郎將菅原宗辰公之母氏法諱浄珠院徳霖了潤大姉者因其令妹為渡邊氏某之室名彌禰之勸誘以延享五年相與捨貲再建令之寺宇是也大姉又見施入黄金若干兩以充永世不朽香華料及寄付佛具法器數品今茲丁丑春重命有司俾鑄銅鐘一口懸諸道場以備講時之用也丸厭諸福業將廻向於大應院梅開雪峯大居士謙徳院續甫尚故大居士并梅園院心操紹源大姉及菅原家歴代聖靈兼大姉之親戚祖宗等幽魂薦其冥福は大姉之所庶幾也後住此寺者豈可謬邪宝暦七年四月八日鐘成適為銘曰皇孫陳迹院号親王星移物換紺園且荒淑人母氏脩此道場嚴飾佛宇結構僧房戴命鳥氏梵鐘新懸鯨音偏震龍質維鮮破幽魂夢驚久蛰眠聖善餘慶福履萬年金剛峯寺親王院住持弘範誌治工堺池田次郎平衛尉藤原金吉

イチイ・アララギ・オンコ

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭



イチイの葉枝



伐採されたイチイの木の切り口

この二月、奥の院・弘法大師御廟前、玉石が敷かれている高野山でも最も聖域・聖地にあったイチイ科・イチイという常緑高木の幹が腐食し被害を及ぼす恐れのある支障木として伐採されました。その木は幹周が一・三メートル、樹高約一〇メートル、樹齢は不詳とのこと。高野山の

植生上、その聖地に、いつの時から植えられたものと思われま

す。イチイという和名は、古くは五位

以上の人が束帯着用の際、右手に持った笏が、この木の材でつくられたことから正一位・従一位の一位によるといいます。

アララギ・オンコという別名もあり



笏 (しゃく)

り、アララギについてはアイヌ語のアラマニ、ララマニ、ラルマニが語源らしいといい、アイヌ語で二(ni)は「木」をさします。

紀州の名湯・いで湯の里、林業の村として知られている龍神の人達もアララギと呼んでいるそうです。

オンコはアイヌ語で「神の木」を意味し、この木の心材や果実が「赤い」ことにも関係があるという説があります。

なお、アイヌの人は、この心材を用いオヒョウという木の樹皮の繊維で織った布を染めアツシという上衣をつくったといい、各地で心材は草木染でも赤色系染材、建材、彫刻材、上等の鉛筆材などに。イチイの属名は「弓」、種を示す語は葉の特徴を



熟したイチイの実

表す「とげ状にとがった」という意味の学名がつけられ、往時は弓材としても。

和漢三才図会には蝦夷及び松前の人には於豆古と呼び秋には桜桃のように紅熟した実を食う、味甜美と記されています。

以上のようなことから笏木、赤木、山蘇芳、赤実などの別称もあります。北海道や東北北部では低山・平地にも、本州、四国、九州の深山に自生しているそうです。

高野山では自生種は発見されていないようですが、植栽されているものでは、この度、伐採されたほどの大木は別として、樹高一〜二・五メートルくらいのは見(観)ることができ、時に、赤(紅)く熟して甘い実をつけたものにも出会うことができます。

高野山の文化

高野山の明神信仰

前奥之院維那 日野西 眞定

(一) 高野山の丹生・高野両明神の発生

(1) 結界の発生

④高野山の民俗信仰による結界のシンボル

弘法大師空海が弘仁八年(八一七)に行った結界の法は、密教の行法で、七里四方を結界するものであったが、高野山内を囲む山頂を辿る「線」であった。ところが日本には元来聖なる山(水源信仰と先祖霊を祀る山中世界の信仰を持っている)に対しては独自の結界についての信仰があった。柳田国男が『老女化石譚』に述べているが、比丘尼石・美女桜のような石や木がそのシンボルとして使われていた。

高野山でも、北側の表参道側に、「押上石」(写真1)と「ネジ石」がある。伝承によると、弘法大師空海の御袋が八十三歳になった時、讃岐の国から来て、この岩のところで大師に会い、

山上に参りたいと執拗に願うので、弘法大師空海は自分の身につけた袈裟を岩の上に敷き、これを無事に越えたら山上に同道しましょうといった。御袋は喜んで、袈裟を越えようとした時、「八拾三ノ御年、月の障一テキヨリ、御袈裟に懸り火焰と燃エ上リ、火ノ雨頻リニ降ツ」た。弘法大師空海は、御袋の身を案じ傍らにある大石を押し上げ、その下に御袋を入れて守った。御袋は無念だと、そこにある石をねじた。「夫ヨリ押上石、ネジ石ト申ス」ようになった。さらに、登山を諦めた御袋を、大師は慈尊院に住ませ、その加持力により、弥勒菩薩として祀るようになったという(弘法大師御袋略縁起中橋家文書)。この伝承から、女人禁制は血の問題によって行われたことが明らかにされていることが参考になる。



写真1：押上石(五十四町石付近)

また女人禁制の山麓に、その山に寺を建立した僧の母親を祀り、女性の救済役をつとめさせている。これは根来寺の大日堂(覚鑿の母妙海尼)・大峰山麓の母公堂(役の行者の母)・比叡山の花摘堂(最澄の母妙徳尼)など、

基を一にしている。ただし、慈尊院の場合、平成十一年三月に、同院四国堂(今は大師堂と呼ぶ)から発見された妙音尼が奉納した木札により、それが天文九年(一五四〇)からはじまったことが明らかとなった。これは、こう



写真2：弘法大師御衣乾し岩（高野町南）

した動きがはじめられた時代を知る上では貴重な資料だといえる。

次に、裏参道には、神谷地区から極楽橋にかかる手前に、「四寸巖」がある。「紀伊続風土記」(五・三〇四頁「旧跡拾遺山外」)によると、両縁が高めで中が窪んだ巖で、窪みの大きさは四寸ばかりで、ちょうど片足の痕の大きさである。そして、そこを歩まない、道を進むことが出来ない。「俗に親の足痕を踏むといひ重んぜり」とある。先祖信仰と結びつけているが、また「古老の伝に、此の足痕は大師の踏窪め給ふなり」と説く人もある由を記している。また、別に「蟻の関とも、

蟻の戸渡ともいふ」とある。これも境界石の一つと考えられる。四寸岩の名称は、立山及び大峰山の参詣道にもある。また「蟻の戸渡」の名称は、熊野の参詣道中にもあり、参詣人が多く連なつて参る姿を描写、または願つて表現した言葉のように思える。

奥の院裏の南村には「弘法大師御衣乾し岩」がある(写真2)。「紀伊続風土記」(五・三〇四頁「旧跡拾遺山外」)では、南村と林村の間にある。ここから西は「高野結界の内にて、牛猫鶏等を禁じて入れず」と記している。明らかに「結界石」の性格を持っている。

しかし、弘法大師空海の描いた結果線は、御廟裏の三山(楊柳・天軸・摩尼の三山)の尾根を伝わつて通つたと考えられ、その中の山の一つの摩尼山の麓に在る。石の大きさは、ちょうど馬の背のような形をして手前が低く、後方が太く、高い姿をしている。長さ三、高さ前方一・一、後方一・六、幅は、前方〇・五、後方一・六各メートルほどある。その石に向かつて右側に、長さ一・四、幅〇・八、高さ〇・三各メートルの小さな石がある。弘法大師空海は、ここに来て、大石の方に衣を掛けて乾し、小石に腰を掛けて休んだと、現在この石を祀っている橋詰謙二氏は語ってくれた。すぐ傍に、小さな谷があり、小川があるが、そこに高野

山への参詣道があり、昔はここを通つて高野山の奥の院へ参つたという。

以上は岩であるが、別に川がある。表参道傍の花坂(高野町)に流れている鳴河である。正和二年(一二三三)高野詣をした「後宇多院御幸記」に出ている。その記述によると、「御幸ノ中間、俄ニ雷電降雨シケル事、近里ノ女性等其ノ数巨多、各々御幸拜見ノ為メ、仮ニ男子ノ姿ヲシ結果ノ地ニ入ラント擬ス」ということが分かり、結果外に追ひ出されている。

その前文に、「昔都藍比丘尼、靈峯に詣デント欲スル也、鳴河ヲ越エズシテ、既ニ五障之拙姿ヲ恥ヅ」とある。「都藍比丘尼」とは、女性宗教者のグループを指す。そうしたグループの一人が、高野山麓にも来ていたのである。花坂の「ハナ」は、山の最初の登り口を指す。ここを「結界の場」と信仰する人もいたのである。慈尊院にも妙音尼が来ていたが、この人は「西国三十三度巡礼行者」という、西国三十三番の観音霊場を三十三度巡礼するといふ、特殊な行者であった。天野社にも女性職員がおり、高野山山麓には、この三箇所に女性宗教者の存在が認められる。

「都藍比丘尼」は、『本朝神仙伝』(大江匡房(一〇四一〜一一一一)編)にも出て来る。「都藍尼者、大和ノ国

ノ人也。仏法ヲ行イ長生ヲ得ルコト幾百年ヲ知ラズ。吉野山麓ニ住シ、日夜精勤」していたが、「金峯山ニ攀ジ上ラント欲ス。雷電霹靂シ遂ニ到ルコトヲ得ス」とある。そして、それは「女人ハ通ハザルノ故ナリ、所持ノ杖麥シテ樹木ト為ル、拘ル所(つかまつた所)ノ地陥テ水泉ト為リ、爪ノ跡猶存ゼリ」とある。結果のシンボル木と池(水泉)とがあり、池には爪の跡がある。

この「都藍尼」という巫女については、白山・立山などにも伝承があり、柳田国男は『老女化石譚』(「妹の力」所収)では、結界の近くで修法していた巫女のグループの一種であろうとする。「虎ヶ石」など、「虎」と結びつけられる場合が多い。高野山麓にも、このグループの一人が来ていたが、その場所は、鳴川の端であった。

以上により、高野山の結界は、弘法大師空海が描いた、高野山の周辺を囲む尾根を「線」で描いたものであるといえる。その外側には、日本人が聖なる山に対して持っていた「石」「川」が認められる。他山には「木」も多い。そして、この結界の信仰も共に生きていたのである。弘法大師の描いた「結界の線」は、これらの内側を、それらの存在を意識しながら引かれたと考えられる。

霊宝館における業務の現況と職員の紹介

館長 細川 康裕

(一)

霊宝館は、総本山金剛峯寺をはじめ、山内塔頭寺院一一七カ寺の所有する貴重な文化遺産を保存・展観する目的を以て、大正十年に建設され、その後、山内各所に点在し、建造物等収蔵庫に収納出来ないところの多様な文化財を含めて、昭和三十三年には、財団法人

刻・絵画・書跡・工芸・建築等について個々の専門的知識を有する者が、配属されているのが望ましいのでありますが、財政状況や、業務量の拡大、その他諸般の都合に押されて、極度の人材不足が続いて参りました。

(三)

高野山文化財保存会が、それらの文化財を護る為の管理団体として、設立認可されました。設立当初の「寄附行為」の規定によれば、事務所は、総本山金剛峯寺に置かれましたが、昭和六十三年には、当館に移管されて居り、

さて、当館は博物館に準ずる施設であるとの認識によって、公益法人としての立場で活動を続けて参りましたが、近年は、「官から民へ」の権限の委譲が叫ばれる中、政府の方針によって、抜本的な改革案が実施されることとなり、遂に昨年十二月には、現行の

(五)

材を渴望いたしておりましたところ、本年四月一日付にて、二名の新人職員を迎えることが出来ました。当館としての本来の業務であるところの、学芸分野の体制を整備するための、優秀な人材であることを、ご報告致します。

昨年度当初からの、本山の異動発令等により数名の、職員の顔触れが変わっておりますので、この機会に、当館の全職員の氏名を列記して、ご紹介致します。一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

記

- 細川 康裕 (館長)
 - 木村 悟 (課長)
 - 萱野 勝行 (参事)
 - 宮崎 恵仁 (主任—学芸担当)
 - 島 悦男 (主任—財務担当)
 - 加古智津美
 - 福形安希子
 - 中安 真理 (新任)
 - 友鳴 利英 (新任)
- 以上

霊宝館は、その業務の一部を担う機関として位置付けられております。また、文化財物件の管理のみに留まらず、火災等、不慮の災害に対処するため、平成五年に発足したところの、高野山防災協会の事務局も当館に置かれております。即ち当館の業務担当範囲は、建設当初の「博物館の業務に準拠する分野」のみに留まらず、非常に広範な内容となっております。

制度を全て破棄した内容の「新公益法人法」が発足いたしました。新しい制度に對する対応の方針については、当方にとつて、今後の課題であります。従来に比較して、より厳しい視点に立つて「不特定多数の人々に対する利益の増進に寄与する」ための公益性を展開する能力の有無が問われる事態となっていることは明白であります。

広範な業務に加え、上記の如き法改正に伴う課題をも考慮して、有能な人

新任ごあいさつ

●四月より、霊宝館勤務となりました。私の仕事は貴重な文化財を保存し、後世に伝えることで、高野山においては先人が千年以上に渡って続けてこられた重要な任務です。このような仕事をさせていただくことに、大きな喜びと責任を感じております。ご来館の皆様にも、先人達の残された霊宝の数々を深く知っていただけるよう努力していきたいと思っております。

友鳴利英

●高野山の歴史的な文化財を受け継ぎ、より多くの方々に知っていただき、末永く守り伝えていくことの重みを痛感しております。当館は展示施設として、大正十年(一九二〇)開館の本館と、昭和五十九年(一九八四)開館の新館とを併用しており、展示の特色のひとつに、優れた仏画などの一部を、ガラス越しではなく、直接にご覧いただける点があげられると思います。皆様のご来館を心よりお待ちしております。

中安真理

霊宝館本来の業務体制としては、彫

正に伴う課題をも考慮して、有能な人